

## 立教のグローバル教育を考える

日 時：2013 年 12 月 13 日（金）18 時 00 分～19 時 30 分

場 所：立教大学池袋キャンパス 太刀川記念館 1 階 第 2 会議室

### ◆司 会：

山口 和範 本学経営学部教授 グローバル教育センター長

### ◆参加者：

武田 珂代子 本学異文化コミュニケーション学部教授

前田 英樹 本学現代心理学部教授

野田 公一 氏 楽天株式会社執行役員 グローバル人事部

中山 加捺 本学経営学部国際経営学科 2 年次

北山 流川 本学経済学部経済学科 1 年次

○山口 本日はよろしくお願いいたします。司会を務めます経営学部の山口です。グローバル教育センターのセンター長を、今年度務めています。今日は2名の学生が参加していますが、それぞれグローバル教育センターが提供している「国際協力人材」育成プログラムと、グローバル・リーダーシップ・プログラム（以下GLP）を受講している学生です。

それでは、最初に自己紹介から始めたいと思います。順番に、前田先生からお願いします。

○前田 私は、現代心理学部映像身体学科の教員で前田英樹と申します。今日は所用により中座しますが、どうぞ

よろしく。私はグローバリズムには全面的に反対で、言ってみれば敵なんです。

○武田 武田珂代子と申します。異文化コミュニケーション学部と、それから独立研究科の異文化コミュニケーション研究科に所属しています。専門は通訳翻訳研究で、立教には2年ちょっと前に来ました。それまではアメリカに22年いまして、グローバル人材ということで言えば、私が前に勤めていた学校が、まさにグローバル人材を輩出するためにつくられた大学院なんですから、そこにおりました。

○中山 経営学部国際経営学科2年の中山加捺と申します。私は「国際協力

人材」育成プログラムのソリューション・アプローチBという授業を履修していて、経済発展について学んでいます。よろしくお願いします。

○野田 楽天の野田と申します。よろしくお願いします。楽天には2004年に入ったので、だいたい10年ぐらいおります。会社が公用語を英語にして、いろいろ注目を浴びることが多いのですが、その英語公用化を推進するグローバル人事部というところを今担当しています。

○北山 経済学部経済学科1年の北山流川と申します。僕はGLPを受講しています。今日、この座談会に参加できることをとても嬉しく思います。よろしくお願いします。

○山口 私は経営学部の所属で、専門自体は経営学ではなくて、実は統計学です。もともと立教には1990年に入って、長い間、社会学部産業関係学科に所属していました。経営学部をつくるときに経営学部に移って、そのとき、ビジネスにおいてグローバルということはもう欠かすことができないということで、大学のグローバル対応に関わってきました。2013年の4月に立教大学でグローバル教育センターをつくることになり、なぜか私にセンター長をやれという話がきて、今、センター長として、グローバル教育センターの取り組みをきちんと軌道に乗せるという仕事をしています。ただ、将来的に、「グローバル」とか「国際化」というのが大学の中で言葉として残るとするのは、あまりいいことではないと思いますので、早くどこかに着陸して、当たり前のように行われるようになるということが必要なのだろうと思っています。

## 〈大学に求められる「グローバル人材育成」〉

○山口 それでは最初に、立教大学の取り組みや、最近、文部科学省が大学に対してどういう要求をしているかということについて、ちょっとだけ話をしたいと思います。

補助金関係では、最初はグローバル30が皮切りで、そのあとグローバル人材であるとか、国際化推進の補助金というのが続きました。来年にはスーパーグローバル大学ということで、研究系を10校、教育系を20校採択し、10年間にわたる大規模な補助金を付けるという計画が進んでいます。

文部科学省は、グローバル人材育成ということをかなり言っています。それは、学生がどういう専門性を持って卒業したとしても、今後活躍する場は日本だけではない。世界に出て活躍するということに、その専門性をきちんと世界で発揮するために大学としてサポートすることの必要性を、強く意識しているからなのではないかと思います。それと併せて、研究面、教育面を含め、世界に対して大きく貢献できている日本の大学が少ないのではないかということ、その面も含めて要求をしてきているのではないかと思います。

立教大学の中では、国際化推進会議がいろいろな形で活動しています。例えば具体



山口 和範

的な数値目標として、5年後までに、在学生のうちの半分は海外体験を、何らかの形で留学もしくはいろいろなプログラムに参加する、そして10年後までには、全員の学生がそういうところに参加できるようなプログラムを用意する、ということ掲げていて、それに向かって現在プログラム開発が進んでいます。あとは、単に海外を体験するということだけではなくて、本来、それぞれ大学が果たすべき専門を学ぶという役割と併せ、どういうことを学生が卒業までに身に付けておくべきかということが今一番課題になっていると思います。

### 〈企業が大学に求めること・期待すること〉

○山口 それでは最初に、楽天の野田さんから、今企業でどういうことが求められていて、大学側に対してどのような期待をお持ちかということをお聞きして、それに対して教員側のほうから少しコメントをするという形でスタートしたいと思います。

○野田 分かりました。企業といいますが、楽天の話になりますが。企業はゴーイングコンサーンということで、楽天という会社を、長期的に持続的に成長する会社にすることが求められています。長い目で世界の動向を見たときに、日本の中だけで楽天の発展を考えていても、世界的に見れば日本の相対的なシェアは落ちていきますから、楽天が持続的に発展するためには、世界に出ていかなければなりません。

そのため、7年ほど前に、これまで日本だけで活動してきたけれども、これからは世界に目を向けようということで、企業買収をしたり、独自で各国に進出していったりしました。そのときに、インターネットで現地の消

費者とコミュニケーションをとるものですから、日本語だけでやっているのは、どうしてもそこに壁ができてしまう。現地の従業員、買収した会社の従業員とコミュニケーションを



野田 公一 氏

とるためには、日本語ではなくて英語のほうがいだろう、だったら会社の公用語を英語にしてしまったほうが良いだろうということで、公用語を英語に変えたのです。

また、世界に打って出なくても、特にインターネットという新しい産業においては国の規制も何もありませんので、日本で会社活動をやっているだけでも、結局はもうグローバルの競争にさらされていて、グーグルとかアマゾンといった世界の企業が日本の市場を狙って来ているわけですね。インターネットは国境を越えて、どんどん情報やサービスが入ってくる。そうした環境の中で、他の企業と伍して戦ってサービスを普及させていくためには、やはり語学の面のみならず、グローバルな競争力をつけていかなければいけないと思います。グローバルというと英語だけがスポットライトを浴びてしまうのですが、英語以外のビジネススキルなども強化をしていかないと、他社との競争に勝てませんので、グローバルな目線での人材教育の必要性は、ますます高まっていますね。

2番目の質問の、大学に何を期待す

るかということについてですけれども。今、会社では、年間に億円単位の予算を、社員の英語力の向上のために投資しているのですが、本来であれば、大学を卒業した時点で、山口先生がおっしゃった専門性を持って、それを世界で発揮するという能力を身に付けてほしいとは思っています。それ以前の初歩的な英語教育も含めて、この教育は会社がやるべきものじゃないだろうと思っています。本当であれば大学に入学する時点で英語の基礎力は身に付けてほしいし、大学においては、それまでに身に付けた英語によって、専門書を読む、レポートを書く、論文を書く、発表するぐらいの能力は身に付けてほしいというのがひとつありますね。

2点目は、さっきと同じストーリーになるのですが、英語以外でも、山口先生が最初におっしゃった専門性をきちんと身に付けた社会人になってほしいと思っています。いろいろな学生を会社で面接して採用しているのですが、自分の専門分野についてきちんと説明できない学生が非常に多い。大学の4年間で何を学んできたのかな、という学生も多いものですから、英語で何を発表したいのか、何を発揮したいのかという専門性、および最低限の一般教養、そこはやはり身に付けていなければ、そもそもグローバル人材にならないのではないかと考えています。

○山口 ありがとうございます。それでは次に、武田先生に、先ほどの前任校のお話も含めて、今の大学、特に日本の大学を取り巻く環境について、今、野田さんからご指摘があった点についてお話いただけますか。

○武田 今おっしゃった、大学での教育において、ある程度の専門性を求めるというのは、どのレベルの専門性なのかなとは思っています。私は、長くアメ

リカにいましたので、アメリカ的な考えで言うと、学部ではどちらかというトリベラルアーツ、一般教養みたいなものをやっている。工学部とかは最初から専門的なことをやっていますけれども、特に文系ならばリベラルアーツ的なことをやって、専門性は大学院で学ぶという考え方もあるので、学部を出てすぐに、企業で即戦力になるような専門性を求めるのはどうかなという考えがあります。

むしろ、自分のことを分析できるとか、クリティカルシンキングができるとかが重要かと思います。先ほど野田さんがおっしゃったように、英語ができて、伝えたいものがなければ空（から）なわけですよね。言いたいことや自分の考えを論理的に話すことができていなければ、たとえ英語の構文を知っていようと、単語を知っていようと、発音がよかろうと、コミュニケーションは成り立たないわけなので、自分が伝えたいものを見つけられる、そういう大学生活であってほしいと思います。

前にいた大学は、大学院しかない学校でしたが、ミドルベリー大学という大学組織の一部でもありました。ミドルベリー大学は、リベラルアーツの大学なんですけれども、その上にある専門職の大学院に私は勤めていて、日本語で言うグローバル人材、international



武田 珂代子

professionalsとその学校では言っていましたけれども、そういう人材を育てるという学校だったんですね。

今回、ここにお招きいただいたので、文部科学省が言っていることとかを少し調べたんですけども、私が受けた印象としては、どうも日本の企業にとって必要とされる人材をつくるというのがドライバーになっていて、ちょっとその辺りに違和感がありました。もちろん、企業に就職できる人材を育てるというのは大事なことだと思うんですけども。例えば私が前にいた学校で言うと、ビジネスという部分は一つの分野であって、あとは国際政策とか、環境政策とか、NGOで働くとか、紛争解決能力とか、核不拡散の研究とか、そういうふうに、いろいろな分野で仕事ができる人たちを育成していたんですね。だから、企業にとって必要な人材というよりも、もう少し広げた見方がいいんじゃないかなと思います。

例えば、グローバル教育センターというと、国際協力という視点がありますよね。私は、これは素晴らしいと思います。しかも、あまり日本とか海外って言っていないじゃないですか。誰でも参加できるというものですよね。だから、そういう視点は、いいんじゃないかなと思いました。

### 〈グローバル化は必要か〉

○山口 では前田先生、今の日本の風潮についてということでもいいと思うんですけども、今、武田先生がご指摘になった、「日本企業のために」というところが、私も実は気になっておりまして。本来は、未来を開拓するためのグローバル人材であってほしいと思うんですけども、そういう意識って、文部科学省の書類を読んでもなか

なか見えないんです。前田先生は、もっと辛辣なご意見をお持ちじゃないかと思うんですが。

○前田 僕は、立教の経営学部と異文化コミュニケーション学部がグローバル化を進めていることには何も文句ないです。だって、経営学というのは、もともとグローバルな資本の流れの中でやっているものだから、グローバル以外にあり得ないでしょう。それから、競争ということが一番基本の原理で、資本はグローバルに流れますから、当然グローバルな競争をするわけですよ。それはもう明治維新のときからずっと、日本人は、やってきたわけですよ。

それから、グローバルな経営戦略などと言われるときに、必ず文化的な背景の平均的な理解というものを求められるから、異文化コミュニケーション学部のようなものが必要であるということも当然だと思います。

もう一つは科学技術ですよ。科学技術というのは必ずグローバルに発展するから、これも、グローバリズムがいいとか悪いとかの問題ではなくて、強制されたことです。科学技術はグローバルでしかない。



前田 英樹

ところが、世界、人類というのは、経営と科学技術とスポーツ、その3つで成り立っているのかというと、決してそんなことはない。人間の本質的な文明とい

うのは、これは絶対グローバルではあり得ません。文明というのは、その地域に根を張った衣食住の体系、これの上に開花するものですよ。衣食住があって、そこから言語の固有性が、差異が生まれてくるわけですよ。だから、経営や科学技術が、どんなに世界に、共通性を求めても、本質的な文明というのは、互いの微細な差異、豊かなニュアンスのほうへ必ず展開していくものです。だから、そっちのほうを理解しなかったら、人間も文明も理解することができない。

では、どうしてこういうグローバルイズム、国際資本の流れの中での競争と、科学技術の先陣争い、これは表裏一体のものだと思うけれども、こういうものが世界を席卷して、文部科学省は、こぞって全体にこれを押しつけるのかということです。歴史的、人類史的な背景に対する目をちゃんと持っていないと、僕は、大学人とは言えないと思います。それに対するインテリジェンスを欠いては、大学人とは言えない。だから、分からないでしょう、アメリカが、どうしてあんなにも中東世界に入っていけないのか。中東のなかの何が抵抗しているのかですよ、アメリカのグローバリズムに対してね。

あらがう者の声に耳を澄ます。これが大学の知性だと僕は思います。それなしにグローバル化し、競争原理で世界を制圧する、これは、明治維新のとき掲げられた、富国強兵のスローガン、その原理と同じなんですよ、今でも。ただし、戦争はできない。近代兵器がここまで来たら、戦争をすることはもはや不可能になっている。だから、その代理を経済や科学技術でやるということになるでしょう。これは、明治維新の、明治新政府が示した国家方針と何にも変わっていないんで

すよ、その本質において。大きなもの、大切なものをどんどん捨てていつているんです。限りなく多様で豊かな差異に満ちている文明の本質をね。そういうものを理解しようとしないと、人類というのは絶対幸せにはならないし、お互いを理解することなんかできませんよ。どうしてアメリカがあんなにも、例えば中東を理解できないのか、それは彼らが本当の文明というものを知る気がないし、ほとんど知る能力を欠いているからだと思えますね。

○山口 今のはとても重要な指摘だと思います。企業活動とかで世界に出ていくといったときに、前田先生が今ご指摘になった点、そこがないと、多分成功しないし、サステナブルではないと思います。だから今、グローバル化している中で、グローバル人材は、そこをきちんと理解し、対応できる人であると思うんですけれども。

○前田 それは言うのはやさしいけれども、なかなか難しいですよ。それに対応できるって。多様な差異に応じて、その深いところに下りていく精神というものと、グローバルなビジネス活動というものが本当の意味で両立できるのか、僕はよく分かりませんけれども、難しいんじゃないですかね、やっぱり。

### 〈異文化理解・他者理解〉

○山口 例えば楽天さんが、いろいろな国で、当然宗教が違うところで経済活動をしようとしたときって、いろいろなコンフリクトも起こると思うんですけれども、そういう点で、何か具体的な取り組みがあれば教えていただけますか。

○野田 難しいですね。迎合するわけじゃないんですけれども、企業の、僕



らが目指すグローバルな経済活動って、グローバルがこれだというパッケージを世界に広げているというわけではないんです。もちろん楽天が、日本で生まれた楽天市場というサービスを基に、日本で素晴らしいeコマースのサービスを持っていて、これを世界に広げようとは思っているんですけども、そのまま持っていても受け入れてもらえないですよ。まさに前田先生がおっしゃったとおり、衣食住がローカルに根づくものだからです。7年間の試行錯誤で学びました。グローバルというパッケージをつくって、社員に教えて、それをやってきなさいというのでは絶対失敗する。逆説的ですが、それをグローバルで世界中に広げるのが難しいということを体験して学ぶこと自体もグローバルの学びであると考えています。

アメリカで受け入れられたものがヨーロッパで受け入れられるかというところでもない。中国に進出しましたけれども、うまくいなくて撤退したこともあります。特にeコマースという小売りですから、地域に合わせた品ぞろえ、売り方も考えなければいけないし、それを広めるには、現地の社員の声をどうやって吸い上げるかを試行錯誤しながらやらないとうまくいきませんよね。

楽天の本社の中にも、いろいろな国籍の社員がいます。今は32カ国ぐらいの国籍の人がいます。例えばインドの人で、ある一定の種類の食べ物しか食べられない人がいて、食事メニューを新しくつくったり、イスラムの人だと、断食の時期があったり、お祈りを一定の時間でやらなければいけないので会議室をつぶしてお祈りのための場所をつくったり。いろいろなことをやらなければいけないし、学びながらやっていくしかない。そういうもののなの

だ、ということを分かることが大事だと思います。

○前田 そういうものを理解する上で一番基本的なことは、そういうもののへの愛情を持つこと以外にないと思うんですよ。愛情を持って、そういう人たちと一緒に暮らしてみることですよ。それが、人間の文明を本当に理解するほとんど唯一の路でしょう。だから、グローバルな理解なんていうものは、僕は成り立たないと思いますよ。ものの理解って、人と人との個人的な関係でもそうだけれども、限りなく、その人の固有なものに下りていくことでしょう。それで、その人についての何か絶対的な理解みたいなところに、たまには到達するわけですよ。「あいつのことなら何でも分かる」という。それは共感や愛情があるからでしょう。僕は、基本的に文明というのはそういう共感や愛情の上でしか成立しないものだと思う。グローバルな競争社会というものとは、そんなに簡単に両立しないですよ、文明の本来的な在り方は。

○山口 今おっしゃった愛情を持つというためにも、例えば若い人たちが現地に行く、教室の中やネットを通じていろいろな話をするのではなくて、きちんと生活をする。それって大切なような気がします。

○武田 文化慣習の違う人と一緒に暮らしてみるとか、相手がしていることを理解しようとするとか、それも勉強ですよ。そのときには愛情とか共感する力というのがとても大事で。相手に同意しなくてもいいのだけれども、何で相手がそういう態度を取っているのか、それを理解しようとするのはとても大事だと思うんです。私は、どこかに行くことはとても大事で、行かないと分からないことってあると思います。でも日本の中でも、たくさん

外国人がいるわけだし、例えば異文化コミュニケーション学部の学生が今、豊島区の外国人に日本語を教えるというボランティアをしているんですけれども、その中で触れ合うことや学ぶことって、たくさんあると思うんですよね。ヘイトスピーチみたいなのがまかり通っているような国が、グローバル人材の育成うんぬんと言うことについては、ちょっと私は説得力がないと感じます。だから国内も見るべきじゃないかと。

○前田 僕らが学生の頃になくて、今の学生にあるいいものは、東北であろうとフィリピンであろうと、困っている人がそこにいるから助けに行く、という気持ちがあることだと思うんですよね。そこにはもう、グローバリズムも何もないですよ。世界中に困っている人がいたら、どこでも行って助けるといって、そういうふうな流れが生まれつつあって、それは僕らが若い頃にはなかったことですね。だから、そういう行為が、彼らの本当の同情心とか愛情とか共感とかから起こっているのだったら、これは素晴らしいわけですよ。文部科学省が言っているグローバリズムとは全然関係のないところで、若い人たちの中に起こっている流れだと思う。これは全面的にいいと思いますよ。

○山口 それでは学生たちの話も聞いてみましょう。今、いろいろと話を聞いてみて、感想を聞かせてください。遠慮なく、何でも。

○中山 すごく感動しました。楽天さんはとても発展していて、利益も高く、グローバルな視野もすごく広いという印象があるんですけれども、一方で、異文化を理解するには愛情が必要で、幸せの根本というのは生活の基本であるというお話にとっても共感しました。

私は、1カ月だけなんですけれどもハワイに留学したことがあります。ハワイは環境のことを考える人がとても多くて、それはなぜかという、親から子ども、孫の代まで長く続く幸せを考えるビジネスが大事という価値観が育っているからなんです。私はそれにも感動して、そういう基本的な生活を一生懸命できる世界があったらとても幸せだなと思いました。

○北山 先ほど武田先生がおっしゃった、国内に目を向けるというのがすごく面白いなあと感じました。僕は高校時代までは、自分と似ている価値観を持った人とつるんで仲良くすることが多かったんですけれども、GLPのグループワークの中で、日本人の中でも価値観の違いとか、背景の違いとかがあるのだということに気づきました。僕が今受けているプログラムは海外に向けてのものなんですけれども、日本人の中でも個人個人が違うということを学生が理解ししたら、グローバル人材も早く育つんじゃないかなと思いました。

○山口 グローバル教育センターをつくってもらったときに、リーダーシップ・プログラムを入れさせていただいて無理やり頼んだという経緯があります。その意図は、北山くんが言ってくれたようなことで、「世界で」とか「グローバル」って考えたときに、意見や背景が違



北山 流川





う人と、きちんと目標を共有できるか、その訓練が、一番大切なのだろうと思って、コアとしてGLPを立教の中で広めていきたいなあと考えていたんです。

○野田 それは、非常に重要ですね。会社でも、日本でずっとやってきて、いろいろな部下がいる中で、「お前、あれやっとけ」「分かりました」で、どんどん成績が上がる人が、海外に出てもそれでいいかという、苦勞している社員もいるわけですね。現地の社員に「これやって」と言ったら「何でやるんですか。僕、納得できません。こういったほうがいいんじゃないですか」と言われたときに、日本の社員では「つべこべ言わずにやればいいんだよ」と言うような人も中にはいるんですけれども、現地ではそれではなかなか通用しない面もあって。なぜやるのかということ、きちんと時間を取って、面と向かって話してあげる。日本だけだったら言わなくても分かるようなことを、他の国でやると、うまくいかない場合もある。そういった、一人一人違うのだということを日本の中でも分かっているだけでもずいぶん違うし、そういったことがすごく大事ですね。

○前田 一時、他者理解が大事だとか、他者に向き合う倫理がなきゃ駄目だとか、ひどく堅苦しい議論がされ

ていたことがありますが、僕は、そんなことを言う必要ないと思っているんですよ。例えば、北山くんが誰か女の子を好きになるというときに、グローバルな女の子を好きになるか。そんな雲をつかむような一般的な女の子は好きにならないよね。「宇宙にこの子は一人しかいない」、だからほれるんだよね。だから、僕らの愛情って必ず、ただ一つのものに憧れて、そこに向けて流れ込んでいきますよ。そういうものを愛するし、それが命の基本ですよ。差異に入り込んでいって共感するというのはね。

○山口 そういう意味で言うと、個をきちんと尊重できるかというところは、いわゆるグローバルの中で一番大切にしないといけないところですね。

○前田 西洋文明というのは、もともと狩猟、牧畜を文明の基盤にしています。狩猟というのはその行為が、獲物を追い掛けて、倒して殺して、それを他の生き物に盗られないように隠さなきゃとか、絶えず闘争がある。闘争を有利にする土地の拡張競争がある。そうせざるを得ない自然環境、競争社会で絶えず生きてきて、その中でしか文明を築けなかったんです。

ところが、僕らみたいなアジア人の中の、特に農耕で生きていく人間というのは、例えばお米なんか大事にしないとうまく育たないでしょう。自分の子どもみたいに丹精して育てなきゃおいしいお米にならない。それから家族で助け合う。けんかなんかやっていたら、おいしい米はできないわけですよ。だから、僕らの性格って、もともと協調的で愛情に満ちているんですよ。それから「今年の米はどうだった」という、年ごとの米の違いとかを味わい分ける感覚を持っているんですよ。

だから、そういう文明が、西洋の競

争する文明、絶えず領土を拡張して、たくさんの物を確保することで相手に勝とうとする文明、絶えず勝つことが正しいことなのだという考えの文明に対して、どうしても負けるんですよ。だから、僕のような考え方って、グローバルな今の状況の中で、少数派に追い込まれる。

○山口 それを負けないようにするには、どうすればいいんですか。

○前田 こういうふうに言っていくしかない。中山さんは感動したって言いました。人間なら、そうなんですよ。それがいいと思うに決まっているんですよ。ところが、競争世界の現実というものにどんどん巻き込まれていって、後退していく。僕らの考え方も後退させられるという、この現実がある。だから、大学は国家の競争政策にほいほい乗って、人類に対する歴史的な視野も何もないままグローバル化を推進していいのか、いや、いいはずはない。これだけは、僕は言いたいですよね。

○山口 ただ、現実問題として、日本で学ぶ、日本で生まれ育った人たちも、当然、グローバルの中の競争社会にさらされるじゃないですか。そのときに、これまでどおりのものを大切にするというだけだと、学生は被害者になってしまう恐れがある。

○前田 これまでどおりのものを大切にするだけじゃなくて、大切にするというのは、新たにつくり直していくことだと思います。同じものを保守するとか、そんなことじゃないと思う。価値のある文明というのは、絶えず再生産され、つくり直されていって、創造され直していかないと、価値あるものとして維持することはできない。また、それが大事なのだということを知っていなければならない。人類がグローバルな競争ばかりやって、その

果てに、いったい何があるのか。地球資源の枯渇が、必ずあると思うね。いったい誰が、どんな知性がこの競争にブレーキをかけるのか。こっちのほうが重要な問題じゃないかと思う。世界の経済競争に負けるじゃないか、それは確かにそうかもしれないけれども、でも、その勝った先に何があるかということも、大学人なら考えたらどうかと。

○野田 前田先生のお話に100パーセント賛成します。というか、先生の言っていること自体がグローバルな考え方だと僕は思います。

○武田 私もそう思います。

○野田 先生自身は少数派とおっしゃっていますが、まさに先生のおっしゃっていることがグローバルな考え方だと思います。グローバル＝競争ではなくて、そういったものを含めた知識とか、人類全体のことを考えて、地球は破滅するとか、そういう考え方自体がグローバルなんじゃないかなと。

○山口 個々を大切にしながら、それぞれの文明も残りながら、どう共生するか。そこに交流は当然発生するじゃないですか。交流が発生しながら、個々の文明とかそういう伝統をきちんと尊重して残すか。交流すると、そこで新しいことが起こるじゃないですか。そこで変わることは、そんな悪いことじゃないような気もするんだけど。

○前田 おのずと変わるんならいい。例えば、植物が接ぎ木されるみたいに変わっていくなら。日本だって変わってきたでしょう。仏教が入ってきて変わった、近代になって変わったという。それはいいわけですよ。内側から自然に命を継ぐように変わっていくのだから、それは自然なことでしょう。グローバルな競争というのは、そういうものを破壊するものだと思います。

○山口 それはスピードですか。僕はあまりそういう教養のない人間なので、スピードが問題なのか、変わり方が問題なのか分からなくて。あまりにも急激に変わるから、問題なのか。

○前田 むしろ変わっていないと思う。今の、いわゆる文部科学省的な発想のグローバリズムというのは、昔からあった西洋近代の考え方。西洋近代に、産業革命以後の世界に広まった均一な競争。

○山口 均一にしたほうが、産業界は、楽は楽なんです。

○前田 一年中同じような温度の中で、一年中同じものを食べていることが富であるというね。それが快適な、幸せなことであるという感覚は巨大な錯覚の上に成り立っています。僕の考えはむしろグローバルなんじゃないかと野田さんはおっしゃって、そうおっしゃってくださるのはとても光栄けれども、例えば日本の明治期の岡倉天心とか内村鑑三なんかは、これはほんとうの世界人です。本当の世界性を持った人たちで、グローバル資本主義に真っ向から反対しましたからね。近代そのものに対してね。彼らの視野は本当に世界性を持っていた。

○武田 自分で考える力があつた、批判的な思考ができたということでしょう。

○野田 そこだと思います。本当に、自分の頭で考えられるかどうかというところ。

○山口 そういう意味で言うと、大学で若い人たちが一番身に付けてほしいのは、そこですよね。

### 〈批判的思考を身に付ける〉

○野田 武田先生がおっしゃったとおり、クリティカルシンキングとか、ロジカルに説明できる能力とか、自分の

考えをきちんと表現できる能力とかが、やっぱり必要だと思います。昔の大量生産の時代ではないので、今はみんなが同じことをやって、同じものをつくるような世界ではない。知識の戦いです。

○武田 私は、ずっと大学院、プロフェッショナルを育成するところにいたので、2年前に立教に来たとき、ちょっと戸惑いというか、どきどきしながら授業に行っていたんですけども。

私なりに考えたのは、学部对学生に対して、彼らをインスパイアしたいということ。学生の心に触れるということ。学生が何らかのを感じてくれて、自分で何かを考えてくれたら、それで私は成功だと思うようになったんです。学部の授業は。

知識を詰め込むことというのは、今どきはインターネットで、ウィキペディアなどを見たら、情報ってあるわけじゃないですか。では私たち教員は何を教えるのかといったら、ウィキペディアを見たときに「これ、本当じゃないんじゃないか」と疑ってみたり、「他の考え方があるんじゃないか」とか「他の情報源があるんじゃないか」ということを考える力というか、そういうものを身に付けさせるのが大事ではないかと思います。

いったんインスパイアさせれば、例えば、なぜ英語を勉強することが大事なのかということを深く理解したら、ちゃんと勉強すると思うんです。だから、その辺のところを考えさせていかないと、頭ごなしに英語をやれと言っても、何かよくない感じがします。

○山口 どうですか。立教大学に入った1年生と2年生、今、武田先生がおっしゃったようなことは感じますか。

○中山 国際経営学科にESP (English for Specific Purposes) という授業があります。そこで、ユニ・チャ



中山 加捺

ームという企業と連携で、世界におむつや生理用品などを売り出してセールスを2倍にするという課題を出されて、グループワークで挑んでいます。時にはモチベーションが下が

ってしまうこともあるんですけど、そういうときに、世界と戦っていくにはどうすればよいか、という目的をちゃんと考えると、やる気が出て、効率がよくなるので、何をやるにも目的を考えてから行動しないと、と思っています。

○北山 武田先生がおっしゃっていた話を聞いて、僕は批判的思考が大事なのかなと思いました。批判的思考とは、言い換えれば疑問を持つことですよ。

○武田 そうです。疑問を持つことです。

○北山 疑問を持つこととは、さっき前田先生がおっしゃっていた「人を知ろうとする心」だと思います。その中で、自分の中での解決、例えば、何で英語を勉強しなければいけないんだろうといえ、人を知るツールとして英語を使いたいという、自分の中での解決策があった中で、その解決策をどうやって実行に移すかというモチベーションがすごく大事なのかなと思いました。

モチベーションがなければ、批判的思考や疑問自体が生まれず、現状のま

ま、与えられた知識だけを真に受けしてしまうような固まった人間になってしまうと思うので、モチベーションを保ちながら、何でもこうなるのだろうと聞いていく、つまり、オープンにアンテナを張ることが大事なのかなと思いました。

○武田 同じ環境で同じような人とずっといたら、あまり疑問を持たないようになると思うんです。だから、違う考え方を持つ人や違う文化とか、違う気候の所、違う場所になどに行ってみると、自分を相対的に見られて、自分がより分かり、謙虚になると思います。そういう意味で、外に出ていくのは大事なかなと思います。

○前田 僕は、ウィキペディアに書いてあることはほとんどみんな間違いだと思う。それはどうしてかという対象への愛情がないから。

○武田 先生のキーワードは愛情ですね。

○前田 うん、そう。キーワードですよ。愛情があると、これを好きで好きでしようがないという、そのことをうまくしゃべれなくなるでしょう。この人のことが好きで好きでしようがないといったら、どうしゃべったらいいか、どうしゃべっても違う、となるでしょう。そのときに、人は初めて文章の工夫をするんです。本当の思考を生み出す努力を始めるんです。

ところが、好きでも何でもなく、ただの知識だと思っていると、ろくでもないことを書くんだね。ただの知識の羅列。そういうのは全部間違っている。間違っていると言っているんです。学問には、インスパイアされたものがないと、愛情がないと、何一つ成功しませんよ。

## 〈日本の大学をとりまくグローバル化〉

○山口 そういう意味で言うと、今の大学に入ってくる人たち、特に日本に入ってくる人たちを見ていると、入試の知識。

○前田 あの知識ね。

○山口 どうしてこういう問題を出すの、というか。

○前田 インスパイアされていないね、あの問題は。

○山口 どこかで変えないといけないと思うんですけど、今、日本の、特に人気のある大学に入ろうとしたときの入試の訓練が、全然グローバル化してなくて、そこはかなり問題かなと思っているんです。

○前田 外との競争にさらされていないからね。入試は内輪の競争だからね。

○山口 内輪だし、相対評価だし。

○武田 でも、最近は日本の大学に行かないで、いきなり海外の大学に行く人も出てきていませんか。東大に受かったけれども行かないで、ほかのところに行ったという話を聞きます。

○山口 文科省がグローバル人材育成を推進する理由のもう一つは、日本の大学自体がグローバルな競争にさらされているからなんだと思うんですね。だから、いい教育をきちっとできないと、いわゆる日本の中の大学では世界に通用しないというのは、大きいかなと思う。

○前田 外にさらされるときに、何をもって戦うのかだね。何を信じて戦うのか。これは最も大事なことだと思う。どんな価値を信じて戦うのか。

○山口 立教大学には、これまで研究を蓄積している中で、本当は世界で十分に戦えるいろいろな財産があると思うんです。ただ、大学にいる側の人間

として考えると、それを外に発信できていない。そのときに、前田先生は嫌いかもしれないけれども、教員の英語力が問題になってくる。

○武田 そこですか。

○前田 いやいや、僕は英語力を付ける必要がないなんて言っていないよ。

○山口 でも日本人はどうしても発信力が乏しい。大学人でもそうなんじゃないかと。

○前田 それは確かに、日本人の弱点ではあるけれども。

○武田 日本の大学に来て不思議だったのは、紀要です。紀要とは、学内で出す論文集ですが。

○山口 あれは、ワーキングペーパーじゃないんですよね。ほとんどワーキングペーパーみたいなもので。

○武田 ワーキングペーパーとしては出しているんですか。

○山口 昔はそうだったと思いますよ。それがいつの間にか、1本の論文に数える人たちが出てきた。でも、紀要でも、ジャーナルとしても相当トップレベルになっているのも、幾つかあることはあるんです。

○武田 そうですね。

○山口 紀要は、特に日本語でしか書かなくなると、誰のために研究して発信しているのかというのが、ちょっとあると思う。それはもう、完全に日本の大学の問題で。

○武田 私は、必ずしもこのシステムがいいとは思わないんですけど、海外の大学では教員の評価にポイント制みたいなものを取り入れているところがあります。ジャーナルがランキング化されていて、どのジャーナルにでパブリッシュできたかということによって、ポイントが変わるんです。国際的に認められないと、業績としてなかなか認められないという状況が、現実としてありますね。

○山口 前田先生がはじめに指摘された、科学技術やビジネスといったときには、当然、グローバルという話があったと思いますが、研究そのものの、絶対にグローバルじゃないといけないでしょう。

○前田 すでにそうなっているでしょう。経営学部や理学部は。グローバルな研究というのは、英語で書くということですか。

○山口 英語で書くというか、要するに、誰もがそこにアクセスできるような内容、かたちで発信されていないと、その研究の価値は高くない。誰がやるかというのは、別の役目もあるのかもしれないですが。

○前田 絶対に英語化され得ないようなことを、その人がやっていたとしたら。

○山口 問題は、芸術も含めてそうだと思うんですが、言葉以外のものも含めて、きちんとみんなに伝えられるような仕組みづくりは絶対に必要だと思うんです。

○前田 うん。だから、翻訳、通訳というのは、ある意味で深淵を飛び越す仕事で、とても大事です。それにも関わらず、例えば、イスラム圏の何がアメリカの文明に抵抗しているのか、そこには絶対に英語化できないものがあるのかもしれないでしょう。英語化できない何かが。だから、こちらが向こうの言葉を学ばない限り理解できない。

僕らだってそういうことはあるでしょう。芭蕉の俳句をアメリカ人が英語で分かるのか。わからないと思う。ところが、僕らの感性、自然や季節についての感覚には、芭蕉が俳句で創造したものが浸みとおっている。それを何とか英語で、となると、相対的にしかできないという認識が必要だね。

そうになると、僕らはどうするかとい

うと、マイナーの言語を学ぶことによってしか入っていけないという事実があることは、認めなければいけないと思うんだよね。英語さえやれば大丈夫だということは、ないよね。

○山口 例えば、学生がそういうことについてアクセスしたいと思ったときに、重要だと思うことは何ですか。行くことですか。

○前田 その言語を学ぶことじゃないですか。それぐらいの謙虚さを持ったほうがいいね。人を知りたいと思うなら。

○山口 そういう意味で、特に経営学部の事例で言うと、最初は、ビジネスだったのでアメリカへの留学を多くしていました。2年ぐらい前から、アジアやアフリカもきっちと視野に入れています。

ビジネスの現場で言うと、イスラムはかなり大きいマーケットなので、イスラムをきちんと理解できるようになることが大事。特に立教はキリスト教に基づいた大学で、そういった大学はイスラム圏にないので、かなり年数もかかり、難しいかなというのがあった。

そういう風に、いろいろな所に学生が行くチャンスを、大学がきっちと提供すべきではないかとは思っています。そこを増やしていくのは、授業だけではなく、プログラムとしては結構





必要かなと。今、かなり少ないと思うんです。多分、異文化コミュニケーション学部でもそんなに多くないですよね。

○武田 そうかもしれません。日本に帰ってきて、私は、アジアのことを学ぶ大切さをものすごく感じているんです。実は今、中国語を勉強しているんです。遅いんですけど、でも、遅すぎることはないと思って。

日本の歴史や文化を考えたときに、中国や朝鮮半島のことを無視するわけにはいきません。今、日本に来ている留学生は、中国からの留学生が多く、韓国や台湾からも来ていて、その人たちから学ぶことがたくさんあるので、こちらから留学に送り出すときも、アメリカやヨーロッパだけではなくて、中国などにも積極的に出していったらいいんじゃないかなと。

この前、私は初めて学会で上海に行きましたが、すごく学ぶことができました。やはり、行ってみて分かることがあるので、とても収穫がありました。

### 〈自国の理解・自分の理解〉

○野田 さらに言うと、大学生には、アジア以前に、まず、自分の言葉で日本の文化、日本自体を語れる人材になってほしいと思います。前田先生がおっしゃったように、どうして日本人は物を大切にするのか、ちゃんと説明できること自体も、グローバル人材への第一歩だと思うんです。世界のことを学ぶことが大事であるのと同様に、日本のことを自分の言葉で説明できる、発信できる能力はすごく大事だと思います。

○前田 まさに、そうです。

○山口 どうですか。日本のこと、自分のこと。

○北山 僕は、キリスト教の高校出身で、高校生のときにイタリア研修という留学のようなものに行ったとき、自分が日本人の一人としてしか見られていないとすごく思いました。向こうの人からしたら、僕は「ジャパニーズの中の一人で、僕ではない」というのが、とても悔しかったんです。

向こうの若者と交流することがあったのですが、野田さんがおっしゃったように、「イタリアの魅力は○○○で、政治とは◇◇◇だよ」と、若い世代が熱く議論をしていました。その中で、自分は何もできなかった。そのとき僕が何も発言できないから「日本ってそんなものなのかよ」みたいに、日本のことが自分一人で測られてしまうこともあって、責任は重いんですが、自分が自分として見られていない悔しさもすごくありました。

立教大学に入学した理由は、実はGLPを受けるためです。

○山口 本当ですか。

○北山 本当なんです。実は立教大学しか受験していないんです。全カリのGLPと経営学部のBLP（ビジネス・リーダーシップ・プログラム）を学びたくて。経営学部には受からなくて、経済学部には合格したので、GLPを受けようという気持ちで来ました。

その中で、自分をどう成長させていくとか、多文化の理解をどうするかというのには、まず自分が誰なのかを知って、何がどうつながってきたのか、自分自身のこと、自分の生き立ちや自分の魅力を説明できることが必要なのかなと思います。

○武田 うん。自分を知ることだよな。

○野田 今度、日本文化発信型英語通訳検定があり、僕はその審査員をするんですが、その検定は、英語で日本の心を伝える、日本人のアイデンティティ

イーを持って、英語で説明できるかを見るものなんです。「空気を読むってどういうことですか」、「なでしこジャパンの『なでしこ』ってどういうことですか」、そういうことを英語で説明できますか、と問います。

○前田 さっき言った、岡倉天心の『茶の本』とか、内村鑑三の『代表的日本人』は、最初から英文で書かれているんです。あれは見事なものですよ。英語としてもかなりの表現だと思うし、溢れるばかりの日本に対する愛情があるね。

だからもう、あれでいいんですよ。新たにグローバル人材と考えなくても。そこに帰ればいいのかもしいい。

○山口 そうなんだけど、能力を持った学生はたくさんいるけれども、日本のことがなかなか語れない。それはどうしてなんだろうということが、疑問としてあって。

○前田 日本人はもともとシャイなんですよ。

○山口 単にシャイだけじゃないような気もするんですけど。

○野田 語る訓練をされていないからではないですか。

○武田 そうですよ。

○前田 それは、農耕民族だから、仲間内で協力して、譲り合いながら、みんなですべて生きてきたわけですよ。だから、ある意味では、それはいいことなんです。

○山口 そういう意味では、個を殺している。

○前田 個を殺しているのではなくて、それでよかったんです。お互いに協力しあって、物を大事に育てる文明のほうが幸せです。

○山口 経営学部でリーダーシップ・プログラムをやっているんですが、アメリカのビジネススクールでリーダー

シップ・プログラムがスタートしたときに、どこを参考にしたかという、実は日本なのです。日本人はグループワークがうまくできる。海外のリーダーシップの研究者とこのプログラムについて話したときに、「日本でそんなことをする必要があるのか、日本人だったとしてもとできるだろう」と言われました。ただ、日本人は、わりとダイバーシティが小さい中ではそういうことができるけれども、ダイバーシティが増大したときには、なかなかうまくやっていけないのではないかと思います。

○前田 生活共同体の中では、日本人はとてもうまくやるんです。戦後の経済成長は、そういう要素が非常にあって、日本人の資質に根ざしたところがありましたね。

○山口 それで問題は、世の中が変わってきていて。例えば、日本の社会が持っていた教育力。社会に出る前に、一人一人に対して、いろいろなかたちで、学校以外で彼らを育てていたこと。それが、僕らのころよりは、今の若い人たちが育った環境のほうが、かなり落ちているのではないかという心配があります。そのことを、社会に出る前に、大学の中で何とかしろ、という圧力になっている気がしています。

○前田 日本人は自分の意見を堂々と言えないとか、他人と議論できないとか、自己主張が弱いとか、すごく否定的に言われているでしょう。僕はそれをおかしいと言っているんです。とても一方的な価値観で判断されている。

○山口 いや、例えば、リーダーシップ・プログラムの中で言っていることはそうでしょう。

○中山 はい、そうですね。

○山口 人の話をちゃんと聞けとか、フォロワーになれとか。

○前田 そうそう。西洋社会はみんな

な、「俺が俺が」と言い、他人を押し  
のけ合う。だから安全保障みたいなこ  
とが必要なんだ。それを、西洋人は倫  
理と言っているんです。アジアには、  
一緒に生きていく道徳があるんです。

○山口 昔は、そういうのは小さいこ  
ろから社会の中で訓練されていました  
ね。僕の出身はすごい田舎なので、そ  
ういう中で言うと、おじいちゃんおば  
あちゃんから怒られながらみたいな。  
そういうことが減ってきているような  
気がして、心配な面があるんです。

○前田 縦の系譜で継がれていくもの  
が、だんだん摩滅してしまっているん  
ですね。日本の中で。ひいおじいちゃん、  
おじいちゃんからずっと来ている  
ものが。

○山口 われわれのような50歳以上の  
教員の持っている感覚と、若い人たちが  
持っている感覚は、その辺がちよっ  
と違うのかなと。

○前田 それは違うでしょうね。でも、  
僕はすごくオプチミストだから、  
おそらくそういうのはなくならないと  
思うね。なくなっても必ずよみがえる  
と思う。

それでは、この辺りで失礼いたしま  
す。

(前田教授退席)

### 〈外の世界を見るということ〉

○山口 企業で人事を担当されてい  
て、世代間で感じられることはありま  
すか。

○野田 世代間で感じることは残念な  
がら、うちの会社ではまだありません。  
若い会社なので、年齢が圧縮されて  
いるんですね。20歳代が大半で、平  
均年齢が31歳だから。

○武田 すごいですね。

○野田 40歳代は少数派、50歳代は数  
えるほど。

○山口 本当に若い人たちの会社です  
ね。

○武田 日本に帰ってきてもう一つび  
っくりしたのは、就活です。12月にな  
ったら、いきなり、みんな同じ格好を  
し出して、キャンパスの中を走ってい  
るということ。不勉強で申し訳ないの  
ですが、ああいうかたちでの採用しか  
ないのですか。

○野田 やはり、そのシーズンに合わ  
せたことはやっています。毎年、大学  
生を300人ぐらい採用しています。

○武田 中途採用はありますか。

○野田 あります。だいたい年間600  
人ぐらい採用し、300人ぐらいが新卒  
で、300人が中途採用です。

○武田 私がまだアメリカにいた2~3  
年前、日本のある大学に呼ばれて講演  
したとき、よく質問をする積極的な学  
生がいました。英語も一生懸命頑張っ  
ていて、留学するのと聞いたら、「し  
ない」と言ったんです。なぜと聞いたら、  
「就職に不利だから」と、そのと  
き言ったんです。タイミングが合わな  
いらしいのです。でも、そういうこと  
はもうないのでしょうか？

○山口 ありますよ。

○野田 大いにありますね。

○武田 その辺は、制度的に変えてい  
ただけたら。

○山口 今の2年生からは、少し遅ら  
せることにはなっています。ただ、実  
質的に、卒業してからではなくて、在  
学中に就活することになってしまっ  
ているので。

経営学部をつくるときも、3年生の  
後期から4年生の前期に留学に行っ  
てほしいという希望があったんです。で  
も、ほとんどの学生は、2年生の後期  
から3年生の前期に行くんです。なぜ  
そこを選ぶかということ、やはり就活で  
す。特に、今だと3年生の12月1日から  
就活がスタートしますので、その時期

には日本にいたいという学生が多いです。

ただ、留学して、4年生の4月に帰ってくる学生も少なからずいます。でも、彼らは彼らできちんとした職場を見つけていることも事実です。だから、時期的に3月に活動していなくても、採用してもらえる会社はありそうな気がするんですけども。

○野田 うちの会社は4月入社と10月入社があり、10月入社なら卒業を半年ずらせますので、そういった学生も採用しています。ほかの日本企業は追隨しないので、けっこう今、ごそごそといるんです。

○山口 今、立教大学は9月にも卒業できる仕組みになっているので、留学をうまく絡めて、10月採用をしていただけの企業が増えてくるとありがたいですね。僕は、必ずしも4年間で卒業しなくてもいいと思っているのですが、それをうまく使いながら、9月末卒業で、10月1日採用というところには、きちんと入れるような感じにもなっていると思いますよ。

○野田 絶対に、ほかの企業でも増えてくると思いますけどね。

○武田 例えば、2年生や3年生でも、海外でボランティア活動をしたら、それが単位として認められる制度はあるんですか。

○山口 グローバル教育センターとして、来年度、国連ユースボランティアについては単位化することにしました。

○武田 素晴らしい。それはいいですね。

○山口 実は、今年度は3名派遣しているんです。今年度、異文化コミュニケーション学科の学生は1人、東ティモールで活動しています。次年度からは単位化することが認められました。

○武田 私の次女は、ピースコア

(Peace Corps) に行っていたんです。日本語では平和部隊と訳していますが、青年海外協力隊のようなものです。2年間のボランティアに行っていたのですが、でも、それが大学院の修士課程に組み込まれているんです。1学期、2学期に知識やスキルを勉強して、3学期目として2年間、ボランティアに行くわけですよ。戻ってきたら、それを単位として認めてくれて、あと1学期で修士号が取れるという仕組みです。そういう学校はアメリカでいくつかあります。そういう仕組みが日本の大学でもできたらいいと思います。

○山口 今、いろいろなプログラムができてきているのですが、日本の場合はどうしても、事前に正課プログラムとして置いておかないと単位が認められず、事後に認めるというのはなかなか難しいのです。個人的には、単位化が事後にでもできるようにならないかなと思っています。来年度の国連ユースボランティアの説明会には、けっこうな人数が来ているとのこと。

○武田 そうですか。ボランティアはいいですね。

○山口 実は、僕は先日カンボジアに行っていたんです。文学部の学生がカンボジアでユースボランティアの活動をしていて、来年度から単位化するにあたって、視察に。相手先が学生に対してどういう印象を持っているか聞いてきましたが、かなり評価が高かったです。今の若い人は、そういうことに非常に積極的だし、大学としても正課として認めて、単位化していきたいと思っています。

○武田 そうですね。

○山口 そういう意味で言うと、中山さんは「国際協力人材」育成プログラムを受けているということですが、海外のプログラムに参加したいという意欲はありますか？

○中山 あります。来年度の国連ユースボランティアにも興味を持っています。今、発展途上国の経済の状況を学んでいて、アメリカや日本などの発展している国が、発展途上国の土地を争奪してしまい、現地のローカルな農民が困っているという話を聞いていると、実際に何が起きているのか、自分の目で見て感じて、私たちにできることを考えていきたいと思っています。

○山口 夏休みには、ミャンマーに、明治大学の学生と一緒に行くようなプログラムがあります。

○武田 素晴らしいですね。

### 〈大学生のうちにすべきこと〉

○山口 前田先生がいなくなっちゃったのですが、前田先生がおっしゃっていた「個々の文明をきちんと理解しながら」というときに、今、大学でいうと4年間、限られた期間で、何かの選択をして、何かができないまま、それは将来、また学ぶというふうにしていかないといけないと思うんですけれども、少なくとも4年間で、一番しておくべきことは何でしょうか。

全員はなかなか難しいかもしれないのですが、勉強はずっと続け、疑問を持つ態度は持ち続けなければいけないと思うんですけど、少なくとも大学時代の4年間、単位で言うとならば124単位の中で、これは絶対にやっておかなくてはいけないというものがあれば、何かコメントしていただきたいのですが。

要するに、大学教育を考える上で、これもやりたいというアイデアはたくさんあるのですが、どこかは削らないといけなくて、でも、これは絶対に4年間のうちに身に付けておいてもらわないと困るということがあると思います。それぞれのお立場で。

○武田 大学教育とは外れるのですが、一つは、旅に出ていろいろなことを学んでもらいたいですね。大学の勉強の中で言うと、私たち教員も、努力してそういうセッティングをしていかないといけないと思いますが、プロジェクトに取り組むことがけっこう大事じゃないかなと思うんです。

課題を設定して、それを解決していく。それにおいては、企画、計画、時間管理もしないといけないし、問題が生じたときには解決していかないといけない。そういうことがあるので、わりと長期にわたるプロジェクトみたいなものができるような科目があったらいいなと思います。

○山口 野田さんから何か、ぜひやってほしいというのは。

○野田 企業が採用するときに、大学生と面接して何を見ているかということです。だいたいどんな企業でもそうで、多分面接の対策本に書いてあると思いますが。

「学生時代にもっとも自分が取り組んだことについて教えてください」という質問をして、企業は、それに対して「どういう理由でそれに取り組んだのか」「どういう困難に直面したのか」「それをどうやって克服したのか」という話を聞くことによって、その人の問題解決能力、発見能力、ストレス耐性などを見ているんです。武田先生のおっしゃったプロジェクトは、まさにそういうことで、自分でそれをどう克服したかという点は、すごく大事だと思います。この科目じゃないといけないということではなく、別に何でもいいのです。

たまにがっかりするのは、例えば、何か目的があって経済学部に入った学生なのに、経済学で何を学んだかと聞くと、答えられなかったりすることです。それから、「文化祭のイベントで

たこ焼きを売る目標を達成しました」と、1週間ぐらいのプロジェクトのことを話す人もいますが、企業は何年間もかけて取り組むような仕事も多いわけですから、持続的にできるのかという点を見ている。何か大きな課題を設定したり、4年間で達成したい目標を見つけたりして、それをやる。そういうことがあるといいですね。1年～2年でもいいですが。

○山口 やはり、長期というのが重要ですか。

○野田 そうですね。

○山口 実は今、立教大学の中で、2016年度からの新しいカリキュラムの検討が進められています。特に、全カリが基本なのかもしれないですけども、学生がそれぞれの専門性を身に付ける中で、各学部から集まってきて、「完成期全学ゼミナール（仮）」というかたちで4年生のときに大きなプロジェクトに取り組ませたいと。ただ、企業採用の側からいうと、4年生のときの取り組みだと、なかなか。

○武田 評価してもらえないですね。

○山口 例えば経営学部だと、一番最初にいきなりプロジェクトをさせるんです。そこで失敗してもらって。基本的に失敗してもらいたいと思っているんです。

○武田 それは大事ですね。

○野田 それをあえてやるのは、すごく大事だと思います。そういう話を僕らも聞きたいので。

○山口 失敗させて、何を学ぶか。なぜ失敗したかということの振り返りをして、次のステップに行って、再チャレンジが2年生のときにできて、3年生のときにもう1回。少なくとも3回はそういうプロジェクトに取り組めるようにはしています。そういう試行錯誤をしていて。1年生のときは何も分からずに、企業からお題をもらってプロ

ジェクトをやっている、どんどん進んでいくのがよく見えるんですね。

それを、今検討している2016年度からのカリキュラムの中で言うと、それぞれの専門で学んできた人たちが集まって、そこで一緒にプロジェクトをやれないか。GLPはそれに近いようなかたちで、いろいろな学部の学生が集まってきて、専門、バックグラウンドが違う人たちが協働で問題解決に当たることが、少しずつできるようになってきているかなと。そういうことを、もう少し長期にわたってできれば、本当はいいのかなと思っています。

一方で、それに対しての批判もあります。そのプロジェクトをすると、その分、本を読んで勉強する時間が削られる。そのバランスをどういうふうにとればいいのか。正直に言うと、経営学部の課題の一つにもなっているんです。専門書を読むことも、大切にしたい。それは、原書で読んでほしいということもあり、そのバランスが。

○武田 難しいところです。

○山口 経営学部として、図書館にはよく行っていると思うんだよね。

○中山 そうですね。池袋図書館にラーニング・スクウェアという場所があるのですが、経営学部のグループワークの集団ばかりがいて。

○山口 そこには行っている。ただ、本を読んでくれない。

○中山 そうですね。予定を合わせて集まって、話し合いが中心です。

○武田 ほかの大学でも、本を読まないという問題があると思います。それから、講義もインターネットで受けている。必ずしもインターネットが悪いとは言わないけれど。本を読んでもらいたいんですよね。

○山口 プロジェクトをするとき、アイデア勝負になってほしくないという思いが、一方ではあります。感性はも



のすごく大切なので、感性を磨く努力はしてほしいけれども、きちんとした裏付けに基づいて行動するとき、それこそ前田先生が言う文明の元である書籍、文字で書かれてあることをきちんと読むということは大切ではないかという気がしています。

○武田 それから、プロジェクトで、人の、世の中のためになるようなことをしてもらいたい。地域の人を助けるとか。助けるというとおこがましいのですが、役に立つようなことを。そうすると、充実感があると思うんです。自分が地域社会のメンバーであるという意識が生まれ、自分はこういう貢献ができるという達成感もあると思うんです。単に勉強のためだけのプロジェクトではなく、そういう視点も必要です。

○山口 その点で言うと、陸前高田市の復興支援に向けた、留学生と一緒にするプロジェクトをスタートさせることになりました。一方で、来年度から、全カリの中でサービス・ラーニングを展開していきます。そういうこともスタートして、さまざまな意味での活動を、大学時代に体験できるようにしていきます。

時間がなくなってきたのですが、もう一つ。武田先生がおっしゃっていた、旅に出ることの大切さと併せて。立教大学の学生に対し、僕が気になっていることは、立教大学の学生の7割ぐらいが、自宅から通っていることです。彼らは環境を変えたことがないのです。環境を変えても自分の力を発揮できるということは、世の中のいろいろなところがグローバル化していくと、ものすごく重要になる気がしています。留学は一つの大きな機会です。武田先生は九州のご出身だと聞いていますが。

○武田 熊本です。

○山口 僕は佐賀出身なので、東京に出てくるのは、ものすごく大変だったんですね。時々いるのが、東京から動きたくない、という人。東京は、ものすごく便利なところ。不便なところで生活できる力がないと、なかなか自分の実力が発揮できないと思って、余計なお世話かもしれないですが、そういうところも、もう少しどうにかして、力として付けていかなければいけないのかなと思うんです。

○武田 私はちゃんと就職せず、ふらふらしていて、バックパックでインドを歩いていたクチですから。

○山口 僕も、大学院のころにインドを回ることがあって、その時大きなショックを受けました。たくさん回っていたわけではないのですが、自分にとって一番影響の大きかった国です。

最後に企業の立場から。環境を変えても仕事ができることは、非常に重要だと思うのですが、楽天さんの場合は、採用時にそういう点をチェックされますか。

○野田 そこは、必ずしもチェックはしません。東京出身で、ずっと親元から通っている子が駄目かという、そうではないので。もちろんそういう経験は評価しますが、そうじゃない子を評価しないというわけではありません。

○山口 でも、例えばそういうための訓練や教育みたいなことはあるんですか。

○野田 そのための訓練はありません。楽天の場合は、ただ海外転勤させるのではなく、その前にグローバル・エクスペリエンス・プログラムというプログラムを受けます。海外の拠点で、半年間、トレーニーとして研修を受けてもらうんです。今はもう50人ぐらい出ているのかな。半年ぐらい現地で体験してみて、以心伝心だけでは仕

事はできないということを、現地の人たちと一緒に働くことで経験させています。

単に英語がうまくなったから、というだけで海外転勤させてもなかなかうまくいかないの、そういうことは難しいんだということを体験するためにも行かせています。

○山口 要するに、仕事よりも先に生活がきちんとできることが基本ですね。

最後に、学生二人から、特に聞いたことはぜひ質問してください。

○中山 では、武田先生に質問していいですか。批判的思考や自分の考えを伝える力が大事で、その力を付けてほしいと、おっしゃっていました。そのために何をするかは自分で考えるべきですが、ヒントとして、どういうところに足を踏み入れたらいいのでしょうか。

○武田 自分が今までに慣れた環境ではないところに行ったらいいと思います。私の場合はアメリカが長かったので、自己主張をしないとやっていけない、せざるを得ないからやっていたという部分もあります。それから、批判的思考も。多様な考え方や価値観に触れることによって、自分が今まで考えていたことは、たくさんあるうちの一つにしか過ぎなくて、ほんの少しの部分しか見ていないんだと思うと、何かを提示されたとしても、それを批判的に疑ってみるというか、そういう癖ができたと思います。

だから、留学することはとても大事だと思います。でも、留学をしなくても、国内でも、いろいろな体験ができますね。ボランティアをやってみるとか。

例えば、私の授業では、必ず手話通訳者を呼ぶんです。ろう者の世界を学生に知ってもらいたいんです。私は、

手話はできないのですが、手話通訳の方々から毎回多くのことを学んでいます。日本の中で一緒に住んでいても、ろう者の文化は独自の側面があるんですね。そういうものに触れるのも大事ではないかと思います。

○山口 その点で言うと、全カリの中には、日本手話という言語科目があります。

○武田 素晴らしいことです。

○山口 ぜひ、あいう科目を学生には取ってもらいたいと思います。

○北山 僕は野田さんに質問です。今、就職活動をする、入社することが目標になってしまっている大学生がとても多いと思っています。そういう大学生に対しどういう思いがあるのか、また、今の社会の問題として、3年以内に離職してしまう人がとても多いという中で、例えば、楽天の企業理念がどのようなもので、楽天の企業理念を理解している学生は、どういう人たちが多いのか、お伺いしたいです。

○野田 楽天は、インターネットによって、居ながらにして受けられるいろいろなサービスを世界に広めたいという理念で、より便利な社会を実現したいと考えています。そのために、既存のサービスではなく、自分たちのサービスをつくっていかなければいけないので、これまでの常識にとらわれず、自分で考えて自分で生み出せる力を持っている人を採用したいと思っています。

ですから、こういう知識を教わりました、僕はこれを知っていますと言われるのではなく、なかなかそれだけでは魅力的ではなく、これまでどういう生き方を生きて、どういうことに取り組んで、どういうことを成し遂げたのかという話を聞きたいのです。

そうすると、大学に入学して就活のことばかり考えている学生は、実は魅

力的ではなく、就職なんか忘れて何かに没頭した学生のほうが、よほど魅力的なんですよ。没頭してくれてさえいれば、多分、就職は1カ月ぐらいで決まる体験はできているはずです。

企業の研究をして、こういう話が嫌われるみたいだなんていうマニュアル本を読んでいる人は、企業から見るとすぐに分かってしまいます。むしろ就職活動を忘れて、本当に自分が没頭できるものを見つけて、それに取り組んでほしい、というのが僕からのメッセージです。

多くの大学生にそうさせている企業が悪いんですけども、大学生じゃないとできない体験を没頭してやってほしい。大学生という時間は、そういう時間だと思います。

○山口 非常に貴重なかたちで締めていただいたと思います。本日はどうもありがとうございました。

○一同 ありがとうございました。